

# 「ブラウンの若旦那」(“Young Goodman Brown”) 再読

齋藤忠利

十九世紀のアメリカの文豪ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) (1804—1864) の短篇作品のひとつ「ブラウンの若旦那」(“Young Goodman Brown”) (1835) は、ひとりホーソーンの傑作であるだけでなく、アメリカ文学の傑作中の傑作として高い評価を受けるに至っており、他のいずれの短篇作品よりも多くの議論を呼び、この作品が最初に『ニュー＝イングランド・マガジン』(New-England Magazine) に発表された 1835 年から十年後の 1845 年以來、1975 年までの間に、この作品を論じた論説類は 400 を超えると言われる<sup>1)</sup>。

よく知られているように、この作品を発表した時点でのホーソーンは全くの無名作家であり、しかもこの作品は無署名で、同じくホーソーンの短篇作品「白髪まじりの戦士」(“The Gray Champion”) (1835) の作者の作として掲載されたが、この二つの作品も含めて、1834 年から 1835 年にかけて『ニュー＝イングランド・マガジン』に発表されたホーソーンの短篇作品は 17 篇にのぼり、ホーソーンはそれらの短篇作品に他の作品を追加して、『物語作家』(The Story Teller) と題する短篇集を編むことを考えていたにも拘らず、その計画は実現せずに終わってしまった。

その後、ホーソーンの大学時代の友人ホレイショ・ブリッジ (Horatio Bridge) (1806—1893) がホーソーンには内緒で出版社と交渉し、保証金まで積んでくれたことによって、1837 年にホーソーンの最初の短篇集『陳腐な物語集』(Twice-told Tales)<sup>2)</sup> が、作者名を冠して出版されることになった。こ

の短篇集の初版1000部は最初の一年以内にほぼ売り切れ、同年内に、これもホーソンと同窓のヘンリ・ワッツワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) の書評が『ノース・アメリカン・レビュー』 (*North American Review*) に、また翌年にはチャールズ・フェノー・ホフマン (Charles Fenno Hoffman) の書評が『アメリカン・マンスリー・マガジーン』 (*American Monthly Magazine*) に、アンドルー・プレストン・ピーボディ (Andrew Preston Peabody) の書評が当時の有力誌『クリスチャン・エキザミナー』 (*Christian Examiner*) に掲載されて、ホーソンは新進作家として、ますますの成功を納めたと言ってよい<sup>3)</sup>。

ところでホーソンが、その短篇集を編むに当たって、様々の配慮を行なったことは想像に難くない。新進作家として自分を売り込もうというのであるから、匿名ではあったが、少なくともすでに発表されていた40篇あまりの短篇とスケッチの取捨選択にホーソンが腐心したことは言うまでもないであろう。ホーソンの母と二人の姉妹がその編集を手伝ったとも伝えられている<sup>4)</sup>。また、参考にできる先輩作家ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) (1783—1859) の短篇集『スケッチ・ブック』 (*The Sketch Book*) (1819—1820) というお手本もあった。

ともかくそのような編集作業の結果、18篇の短篇とスケッチが選ばれて、ホーソンの最初の短篇集が日の目を見ることになったが、恐らく誰しも今日、大変奇妙に感ずることは、この短篇集には、ホーソンの傑作とされる「ブラウンの若旦那」を始め、これも名作とされる「ぼくの身内、モリヌー少佐」 (“My Kinsman, Major Molineux”) (1831) [当初は、「ぼくの叔父モリヌー」 (“My Uncle Molineux”) と題されていた.] や「ロージャー・マルヴィンの埋葬」 (“Roger Malvin’s Burial”) (1831) などが採録されていない点である。これらの短篇作品は、短篇集『陳腐な物語集』が1842年に改訂・増補されたときにも採録は見送られ、そのうち「ブラウンの若旦那」と「ロージャー・マルヴィンの埋葬」の二作は、ホーソンの第二の短篇集『旧牧師館の苔』 (*Mosses from an Old Manse*) (1846) に集められはしたものの、「ぼくの身内、モリ

ヌー少佐」に至っては、なんとその最初の発表の年から20年後の短篇集『雪人形』(*The Snow-Image*) (1851) に再録されている。

このような事情は、ホーソーン自身がその初期の短篇作品をどのように評価していたのか、という興味深い問題を提起するが、ここではその問題に深入りすることをせず、ニール・F・ダブルデイの論文「ホーソーンの、その初期の作品の評価」(Neal F. Doubleday, “Hawthorne’s Estimate of His Early Work”) (1966)<sup>5)</sup>を紹介するだけに留めておきたい。この論文は、ホーソーン自身の評価と読者〔批評家〕の評価の食い違いを、ホーソーンの一つ、謎めいた価値観の結果としているが、とくに新進作家の最初の作品集の編集作業には、その作家の純粋な文学観などの他に、一般読者——アメリカでは、ようやく殖えつつあった女性の読者たち——の嗜好への気くばりや、出版者側の思惑その他、低次元の要因が複雑に絡み合っているに相違ないし、採録する作品の内容面でのバランスや配列の問題なども無視できないことであつたろう。ひと言で言って、ホーソーン最初の短篇集は、やや平凡ではあるが、無難な編集であつたと言ってよく、後述するように、深刻で暗い内容をもつ「ブラウンの若旦那」を取ってこの短篇集に採録しなかったことは、賢明な方法であつたと見ることができる。

さらにまた、グロリア・C・アーリック (Gloria C. Erlich) が想定しているように<sup>6)</sup>、ホーソーンとその姉妹たちをホーソーン父親の死後、引き取って父親代わりをつとめた母方の叔父ロバート・マニング (Robert Manning) (1784—1842) とホーソーンとの、愛憎半ばする親族関係が、「ロージャー・マルヴィンの埋葬」や「ぼくの身内、モリヌー少佐」に反映され、私見によれば、ひょっとして「ブラウンの若旦那」にも黙示的にその影を落としているとすれば、これらの短篇作品をその叔父の生存中に再録することは、ホーソーンとしても躊躇せざるを得ないところであつたろうし、それかあらぬか、これらの作品が、いずれも、その叔父の死後に出版された短篇集に再録されていることは、すでに見た通りである。

さて、前置きが少々、長くなったが、物語の筋として、新婚間もない、一応

「善良な若者」(“a young good man”)が、ある夜、森の中で開かれた魔女の集会に出席して、悪夢的な体験を味わい、そのことによって「信仰」(“faith”)の危機に見舞われ——因みに、若者の妻は、抽象名詞を人名に用いる、アメリカの植民地時代の慣習に従って<sup>7)</sup> “Faith” (信仰) と名付けられている——その後、陰鬱な人間になり果てて一生を終わる、という「ブラウンの若旦那」は、一義的には、ホーソーンのお家芸とも言うべき「寓話的な物語」(“an allegorical tale”)である。人によっては、その寓話性があらわに目立ち過ぎると感ずるかも知れない。そうは言っても、従来、この作品の中心的なテーマが、ハリ・レヴィン (Harry Levin) の表現を借りれば、「信仰の危機と懐疑の苦悶」(“a crisis of faith and an agony of doubt”)<sup>8)</sup> を提示するところにあったとする見解は、大方の批評家たちのコンセンサスを得ているものと思われる。

また、その一方で、この短篇作品の素材に関する研究が、たとえばファニー・N・チェリーの「ホーソーン『ブラウンの若旦那』の資料」(Fanny N. Cherry, “The Sources of Hawthorne’s ‘Young Goodman Brown’”) (1934)<sup>9)</sup>などを始めとして、精力的に行なわれて来ており、この物語がニュー・イングランドの植民地時代の歴史にかかわる作品のひとつとして、ホーソーンの父方の先祖の一人ジョン・ホーソーン (John Hathorne) (1641—1717) が判事としてその裁判に関係した1692年のセイレム村 (Salem Village) [今日のダンヴァーズ (Danvers)] での魔女騒ぎを背景としていることは、今や、定説となっている。ブラウンの若旦那といっしょに森の中の魔女の集会に出席する二人の女性の名前——「クロイズのかみさん」(“Goody Cloyse”) と「コリィのかみさん」(“Goody Cory”) ——は、魔女として断罪された実在の女性の名前である。

「クロイズのかみさん」は、魔女が空を飛ぶために身体に塗る軟膏の効果もなく、「コリィのかみさん」に箒の柄を盗まれたらしく、徒歩で魔女の集会に向かっているが、この軟膏の処方箋をホーソーンは、フランシス・ベイコン (Francis Bacon) (1561—1626) の著述とセルバンテスの物語「犬の対話」

(Cervantes, “El Coloquio de los Perros”) から学んでおり<sup>10)</sup>、また、ホーソーンが魔女の集会を、ゲーテの『ファウスト』(Goethe, *Faust*) (1790, 1808, 1832) 第一部, 「ワルブルギスの夜」(3835行—4220行) と関連づけて考えていたらしいことも、指摘されている<sup>11)</sup>。

つまり、「ブラウンの若旦那」批評は、大別すると、この作品の歴史性をある程度、認める立場と、その一方、この作品の寓話性ないし芸術性を強調する立場とに分けられるようであるが、そのことは、ホーソーンもしくは語り手が作品自体の中で「ブラウンの若旦那は森の中で眠り込み、魔女集会の途方もない夢を見ただけなのであろうか？」<sup>12)</sup>と問うている問いに対して、森の中でのブラウンの若旦那の体験は夢ではなかった、とする立場と、それは夢でしかなかった、とする立場があることを意味する<sup>13)</sup>。〔なお、精神分析的方法を援用して、この作品に性的なイメージが多いことを指摘し、ブラウンの若旦那は、成熟した性を忌避して魔女の集会に性体験の代償を求める「逃避者」(“escapist”) である、とするフレデリック・C・クルーズ (Frederick C. Crews) の立場も、後者に属するとしてよいであろう<sup>14)</sup>。〕

以上、二つの立場のいずれを採るにしても、殊のほか読者〔批評家〕を悩ませたのは、ブラウンの若旦那の妻フェイスが髪につけていたピンクのリボンのうちの一本が、魔女の集会の現場で空から舞い落ちてきて、木の枝にひっかかったところを、ブラウンの若旦那が手にとって見た、とする件りである。この問題も含め、ホーソーンが歴史的素材を巧みに用いて心理学的な洞察力に富む寓話を仕立てあげたことを説き明かしてみせた論文が、デイヴィッド・レヴィンの「疑念の影——ホーソーン『ブラウンの若旦那』における幻影証拠」(David Levin, “Shadows of Doubt: Specter Evidence in Hawthorne’s ‘Young Goodman Brown’”) (1962)<sup>15)</sup>である。この論文は、1692年の魔女裁判において魔女とされた人々本人ではなく、その「幻影」(“specter”)——実はその人々になりすました悪魔——を「見た」ことが誤まって証拠として採用された事実の記録をもとに、ホーソーンは、ブラウンの若旦那が、実は彼自身の疑念でしかなかったものを、「幻影証拠」として誤まって信じたところから

生ずる苦悶を描いた、と論じて、「ブラウンの若旦那」をめぐる論議に、ある種の決着をつけることに成功している。

この論文は、要するに、ひとまずは「ブラウンの若旦那」を、それが背景としている歴史的コンテクストに置いて読むべきことを説いており、ブラウンの若旦那が夜の森の中で目撃したことはすべて、悪魔がブラウンの若旦那を誑かすために仕組んだことであった、としてよいことになり、もしそうであれば、ブラウンの若旦那の妻フェイスのピンクのリボンが一本、夜の森に空から舞い落ちてきても一向に構わないし、家で留守番をしている筈のフェイスの姿〔幻影〕までが、魔女の集会で目撃されたとしても不思議ではなくなる。

そこでホーソーンもしくは語り手が、森の中でのブラウンの若旦那の体験を、お望みならば彼の見た夢であるとしてよい、と述べているのは<sup>16)</sup>、上述したような「幻影証拠」が当然ながら斥けられて久しい、ホーソーンの同時代の読者たちへの配慮が働いたためである、と考えるのがよいのではなかろうか。ホーソーンは、好んで晦渋をこととする作家ではない、というのが私見である。

上述したような「ブラウンの若旦那」批評の経緯を踏まえて、この短篇作品を読み直してみようとするとき、この作品に関して極めて説得的な議論を展開していると思われるのは、マイケル・ダヴィット・ベルの『ホーソーンとニュー・イングランドの歴史的ロマンス』(Michael Davitt Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England*) (1971) である。この書物の中でベルは、「……『ブラウンの若旦那』は、ホーソーンの最も鋭い、魔女騒ぎの分析であると同時に、ピューリタンたちの第二、第三世代の心理の最も鋭い分析でもある。」<sup>17)</sup>と書いている。以下の所論は、基本的には、このベルの立論に拠りつつ、何故にホーソーンがブラウンの若旦那の森の中での衝撃的な体験だけでなく、その死までの生涯を短い作品の中に書き込まずにはおられなかったのか、を考察することを目的にしているが、その本論に入る前に、二、三の疑問点について触れ、それに関して私見を述べておきたい。その疑問点とは、他にもないこの短篇作品のタイトル、主人公たる作中人物の名前に関してであり、すでに解明されている部分もあるが、不分明な点と合わせて論じておく。

すでに、この小論のタイトルに掲げてあるように、この小論で取り上げているホーソーンの短篇作品は「ブラウンの若旦那」(“Young Goodman Brown”)と題されている。従来、わが国では、この作品の二、三の邦訳が、いずれも「若いグッドマン・ブラウン」と題されていた<sup>18)</sup>。このタイトルの邦訳には一見、何の問題もないように思われるが、この作中人物は、姓が「ブラウン」、名が「グッドマン」である、とするような錯覚を読者に与える心配がある。もちろん、姓が「ブラウン」であることは、先ず、間違いのないところである。「ブラウン」は、アングロ・サクソン系の人によくある姓であり、そうであるからこそ、ホーソーンは、この人物に「ブラウン」という姓を与えて、その平凡さを暗示し、また同時にこの人物に万人を代表させている、と考えることができる。つまり、このブラウンは“Mr. Everyman”(「並みの人」, 「普通の人」)なのである。また、英語では「ふさぎ込んでいる」ことを“in a *brown* study”などというところから、「ブラウン」は、「憂鬱な人」とならざるを得ない運命にある、とする穿った解釈も可能となる。

次は、「グッドマン」(“Goodman”)であるが、この名称に「善人」の含意があることは明らかであるにしても、これを「名」とすることには問題がある。そこで OED に当たって、主として十七世紀における、この語の用法を調べてみると、その説明として、1. the master or male head of a household or other establishment 2. a householder in relation to his wife; a husband 3. prefixed to designations of occupation 4. prefixed to names of persons under the rank of gentlemen, esp. yeomen or farmers とあり、当時、この語は「家長」もしくは「夫」の意味で、また、ある種の職人や自由農民の肩書き〔敬称〕として用いられたことが分かる。さらに、植民地時代のアメリカでは、陪審員たちがお互い同志を「グッドマン・〜」(“good-man ~”)と呼ぶ慣習もあったらしい<sup>19)</sup>。

そこで我々としては、ホーソーンの作品における“Goodman”を一種の肩書き、もしくは敬称であったと考え、作中人物を「ブラウンの若旦那」としておく。さらに、この“Goodman”に「家長」もしくは「夫」の含意もあると

するならば、結婚して三カ月しかたっていないのに、早くも一夜、家を空けて新婚の妻を置き去りにするブラウンの旦那は、「夫」として失格である、と言われかねないであろう。

最後に、これは全く問題にもならないように見える形容詞“young”(「若い」)に関してであるが、ブラウンの旦那の祖父も「ブラウンの旦那」(Goodman Brown)と呼ばれていたこと、また、その祖父そっくりだ、と言われた悪魔が「ブラウンの老旦那の姿」(“the shape of old Goodman Brown”)と記されているところから、この形容詞は「若い」というだけではなく、「二代目の」の意を表わし、「二代目のブラウンの旦那」、つまり「ブラウンの若旦那」は、そのように呼ばれて、先代のブラウンの旦那と区別されていた、と考えてよい。従って、「ブラウンの若旦那」の一生を、その死の瞬間まで描いたとしても、その呼び名は「ブラウンの若旦那」のままでもよいことになり、トマス・E・コノリィの論文「若い善人ブラウンが年老いた悪人ブラウンとなった次第」(Thomas E. Connolly, “How Young Goodman Brown Became Old Badman Brown” (1962)<sup>20)</sup>のタイトルに見られる言葉遊びの面白さは、その結果、半減せざるを得ないことになるであろう。

以上の考察を前提として、いよいよ我々は、「ブラウンの若旦那」を論ずべきところに達したが、作品論と深くかかわる問題として、ホーソーンがこの作品を書かずにいらなかった心理的な動機とも言うべきものを、作品自体の中に探してみよう。ブラウンの若旦那は、どうやら悪魔との密約があったらしく、妻の引きとめるのも聞かず、夜の森に足を踏み入れ、待ち受けていた人物——親子だと間違いかねないほどブラウンの若旦那によく似た悪魔——と会うが、先に進むのを渋るブラウンの若旦那にむかって悪魔は、「わしは、警吏だった、おまえの祖父がセイレムの通りでクエーカーの女どもを鞭で打つのを手伝い、また、フィリップ王戦争の際、おまえの親父に、わしの炉で点火した脂松の節を届けて、インディアンの村に火をつけさせたのも、わしだ」<sup>21)</sup>と言う。

悪魔がここで言及しているのは、史実としてホーソーンが聞かされていた父方の先祖の一人ウィリアム・ホーソーン (William Hathorne) (1607—1681)



の所業である。ウィリアム・ホーソーンは 1637 年、インディアンとの、いわゆるピクオット戦争 (the Pequot War) で危く一命を取りとめて、その後、インディアン討伐隊を率い、ピクオット族の捕虜——その数は 200 人と言われる——を奴隷として西インド諸島に売りとばし<sup>22)</sup>、また、クエーカー教徒のアン・コールマン (Anne Coleman) と四人の友人たちをセイレム (Salem)、ボストン (Boston)、それにデダム (Dedham) で鞭打たせている<sup>23)</sup>。

ブラウンの若旦那は、最初、自分の父や祖父が悪魔と密約を交わして森の中に入ったことは無いと言っていたが、悪魔からその父や祖父の所業を聞かされ、悪魔との交遊があったことを知らされると、半信半疑で、「あなたの言う通りであるとしても、父や祖父がこういったことを話したことがないのが不思議だ。いや、本当のところ、不思議ではない。そういったことが、ほんの少しでも噂になれば、ニュー・イングランドから追放されていたろう。わしたちは、祈りと、それに良い業<sup>わざ</sup>で聞こえた一族だ。だから、そのような邪悪さには我慢がならないのだ。」<sup>24)</sup>と、言いはするものの、すでに父や祖父がその所業を故意に隠していたのではないかと疑い始めている。

そのあと、ブラウンの若旦那は、かつて教義問答の教師であったクロイズのかみさんが悪魔と通じていたことを見せつけられ、また、森の中へと馬で急ぐ牧師と執事の話し声を聞かされ、妻のピンクのリボンの一本が空から舞い落ちてくるに及んで、愕然となり、絶望のあまり彼自身が悪魔に変身したかのようなになる。

このようなブラウンの若旦那の苦悶と変身は、父方の先祖の所業を知るに及んでホーソーン自身が思い悩み、そのような先祖の血を受けついでいる子孫の恨み、つらみを作品化したものであって、ホーソーンは、植民地時代のピューリタンの二代目、三代目の心理——先代が立派過ぎて、なにかにつけて負い目を感じ、その結果、先代の粗捜しをせざるを得ない二代目、三代目の心理を解剖して見せる、歴史的寓話を語る形で、同じような精神的負担を抱えていた自己自身を語ろうとした、と見ることができる。

しかもホーソーンが、これほどまでに父方の先祖の所業にこだわるのは、父

親の死後、姉妹と共に母方の実家に引きとられて、大学への進学までも経済的に面倒を見て貰ったことから生じた負い目のために、出来ることなら父方の家系を誇りとしたい、という密かな願いがあり、それでいながら作家を志すことが、父方の家系の誉れとなるどころか、スポンサーとなった母方の叔父ロバート・マンニングの喜ぶところではなかった、というような錯綜した心理状況、生活環境が関係しているものと思われる。

こうした父方の先祖の所業についてのホーソーンの心理的なこだわりは、その後もホーソーンにつきまとい、『緋文字』(*The Scarlet Letter*) (1850)の「序文」として書かれた「税関」("The Custom-House")の中でも、多少、諧謔味をまじえているかのような口調で、以下のように語られている――

……私の先祖〔第一代〕は軍人、立法者、判事であった。教会の支配者でもあって、ピューリタンの、良し悪しいずれの特性をも、ことごとく備えていた。彼はまた、同様に、苛酷な迫害者でもあって、クエーカー達はその証人であり、彼らはその歴史の中で彼を憶えていて、その宗派の一女性に対する苛酷な仕業の一件を記述しており、それは、彼には良い行状も多くはありはしたものの、その記録より永く残るものと危惧される。彼の息子もまた、その迫害の精神を受けついでいて、魔女の殉難にかかわって、ひときわ目立つ存在となったので、魔女たちの血が彼の身の上に汚点を残している、と言ってもよい。……ともあれ、筆者の私は、彼らの代表として、ここに彼らのためにその恥を負い、彼らが招いた呪いがあれば……それが今、そして今より後、取り除かれるように祈る者である。

しかしながら、疑いもなく、この峻厳で、額を曇らせたピューリタンたちのいずれもが、これほどにも長い年月の経過の後に、家系の古い幹が、神々しいまでの苔をかぶっているながら、その天辺の枝に私のような怠け者を生み出したことをもって、自分の罪の十分な報いだと考えてくれているだろう。私がこれまでに抱いたどんな目的も彼らは、賞讃に足るものと認めてはくれまいし、私のどんな成功も――私の実生活が身内の範囲を超え

て成功の輝きに照らし出されることがあったとしての話だが——彼らは、面目丸つぶれとは言わぬまでも、無価値だとしか見做さないことだろう。「奴は何者だね?」と、私の先祖の一人の灰色の影が他の影にむかって呟く。「お話の本の作者だよ! どんない生業——神を崇めるとか、その生きている時代の人類に役立つ、どんな方式に、それがなるのやら? いや、はや、あんな碌でなしは、バイオリンひきにでもなったほうがましだ!」そのような挨拶の言葉が私の偉大なご先祖様と私との間で、時の深淵をへだてて、取り交わされるのだ! とは言え、私がどれほど彼らに侮られようとも、彼らの性質の強固な特性は、私の性質とからみ合ってしまったのだ<sup>25)</sup>。

そこで我々は、すでに見たように、父方の先祖の所業についてのホーソーンの心理的なこだわりが、「ブラウンの若旦那」の執筆の背後にあったことを確認し、この作品においてホーソーンは、そのような汚点を残した家系の末裔たる自己自身の苦悩をブラウンの若旦那に仮託し、投影することによって、その苦悩からの解脱を図ろうとした、と想定することができる。

しかしながらも、もしそうだとすると、この作品がホーソーンの結婚前の長い独身時代に書かれている——ホーソーンがソファイ・ピーボディ (Sophia Peabody) (1809—1871) と結婚したのは1842年——ことを考えると、ホーソーンがブラウンの若旦那を結婚三カ月の青年として設定し、また、船長であった、ホーソーン自身の父は1808年に死亡しているにも拘わらず、魔女の集会にブラウンの若旦那の父親を登場させ、あまつさえ、森の中での衝撃的な体験のあと、陰鬱な人間になり果てたブラウンの若旦那の長い一生を、その死に至るまで辿り、この短篇作品が、

……そして彼が長生きをして、白髪の死体となって墓に運ばれたとき、そのあとに、少なからざる隣人たちのほかに、老婆となったフェイス、子供たちと孫たちの、かなりの長さの行列が続いたが、彼の墓石には希望の聖

句を刻むことをしなかった。その臨終が暗澹たるものだったからだ<sup>26)</sup>。

と結ばれていることに、なにがしかの疑問が残るのである。

そこで、いささか推測をまじえて、その疑問に答えてみたいのであるが、独身時代のホーソーンが父方の先祖の所業についての心理的こだわりを抱えたまま、自分の将来の結婚生活について予想したとき、その結婚生活がなんと荒涼としたものになりかねないのではないか、という危惧と不安の念を感じることにはなかったろうか。また、幼くして父親を失ったホーソーンは、自分の出生に謎めいたものがあると感じざるを得ず、若くして寡婦となった母親の過去の性生活がどのようなものであったのかを思いめぐらすようになり、処女のままであるように見える母親に性生活があったことから、成熟した性を一方では忌避しながら、それでいて異常なまでの好奇心を抱く、というような、性に対するアンビヴァラントな感情を持つに至り、そこから、子供は何人も儲けながらも性生活は十分に享受できない寒々とした夫婦関係を予想するようになったのではないか。

そして、そのような結婚生活しか予想できなくなったとき、ホーソーンは、そのような結婚生活を強いることになる父方の先祖の所業を呪い、これを発き、書き立てて、一種の復讐を果たそうと考える。しかし、「人を呪わば、穴二つ。」天に向かって唾すれば、その唾は自らの上にはね返ってくる。ブラウンの若旦那の暗澹たる後半生は、そのようになってはならないホーソーン自身の将来の結婚生活の未来図であったのではないか。そうであるとする、ホーソーンは、ひとつには自戒の意味で、ブラウンの陰鬱な一生を描いたことにもなる。〔なお、ホーソーンの実際の結婚生活が、まずまずのものであったことは、良く知られている。〕

ここまでのところは、「ブラウンの若旦那」において明示的に言及されているホーソーンの父方の先祖の所業とこの短篇作品の関連性に基く議論であったが、ホーソーンを更に一層、憂鬱にせずにはおこななかったことが、もうひとつあった。それはホーソーンの母方の先祖の一人ニコラス・マニング (Nicholas

Manning) が1680年に、その実の姉妹アンスティス (Anstiss) とマーガレット (Margaret) と近親相姦の罪を犯したとして、その妻から告発され、ニコラス・マニングは森の中に逃亡、二人の姉妹は裁判にかけられ、投獄され、鞭打たれ、5ポンドの罰金を課され、さらし台にさらされた、という事件である<sup>27)</sup>。この事件は、マニング家の忌わしい家系の秘密として、代々、一族の間で語り伝えられていた可能性があり、また、ホーソーンが、たとえば、その短篇作品「アリス・ドーンの訴え」(“Alice Doane’s Appeal”) (1834) の中で近親相姦の問題を取り扱っているところからも、ホーソーンがこの事件を知っていたふしがあり、さらにホーソーン自身はその実の姉エリザベス [イーブ]・ホーソーン (Elizabeth [Ebe] Hawthorne) (1802—1883) との間に、そのような関係があったのではないかと推定する学者すらある<sup>28)</sup>。

このようなマニング家の家系の醜聞は、多感で繊細なホーソーンに耐え難い苦痛を与えたに相違なく、ホーソーンは、自らの中にも淫乱の血が流れているのではないかと危惧し、上述したところとは別の意味からも、ホーソーンに性欲のおぞましさを思い知らせたのではなからうか。しかも、そのようなマニング家に引き取られて育ったホーソーンは、強い負い目を感じるだけに、なにかと口うるさい母方の叔父や叔母たちに反撥せざるを得なかった。

その叔父や叔母たちの中でも、ホーソーンに精神形成に大きな影響力をもったのは、この小論の前半でもその名をあげておいた、マニング家の三男ロバート・マニングである。この叔父は、のちに『アメリカ伝記辞典』(*Dictionary of American Biography*) に果実栽培学者としてその伝記が記載されることになるほどの名士であり、実際、父親代わりとして親身にホーソーンに養育に当たり、その親族の中で初めてホーソーンを大学に進学させていることから、ホーソーンにとっては恩人であった。

しかしながら、このロバート・マニングは、その長い独身生活を通じて、美少年であったホーソーンとベッドを同じくし、ホーソーンは夜毎、夜毎、この叔父の同性愛の誘いを恐れざるを得ない生活を強いられている<sup>29)</sup>。もちろん、この二人の間に実際に同性愛的な関係があった、と断定することはできないに

しても、日頃、父親代わりとして権威のあるところを示すこの叔父が、夜、ベッドの中で何をしでかすのかわからない、という恐怖をホーソン少年に与えていたとすれば、そこからホーソン少年が学びとったものは、ひと言で言えば、この叔父によって代表される大人の「偽善性」(“hypocrisy”)であったであらう。

ここで再び、「ブラウンの若旦那」の議論に戻れば、我々は、ブラウンの若旦那を徹底的に叩きのめし、救い難いほどの人間不信に追いやったものが、正に、人間世界における「偽善性」の問題であったことを思い出すのである。魔女の集会で、キリスト教会の礼拝を模した黒ミサを司どる、聖職者になりすました悪魔は、ブラウンの若旦那ほかの新参者たちにむかって呼びかける――

そこに控えているのは、みんな、お前たちが若い頃から尊び敬まってきた者たちだ。お前たちは、この者たちを自分たちより信心深いと考え、自分たち自身の罪から尻込みし、その罪をこの者たちの義の生活と天上世界を憧れる祈りとひき較べている。だが、その者たちが皆、こうして、わしを崇める集まりに加わっておるのだ。今夜、お前たちには、この者たちの隠れた行状を知ることが許される――教会の、白い顎髭を生やした長老たちが、その家庭で働く若い娘たちに不埒な言葉を囁いたこと。何人もの女が、寡婦の喪服を着たいばかりに、就寝時にその夫に酒を飲ませ、懐に抱いて最後の眠りを眠らせたこと。髭も生えていない若者たちが一刻も早くその父親の富を相続しようと急いだこと。また、色白の小娘たちが――顔を赤らめることはない、愛くるしい者たちよ――庭に小さな墓を掘って、このわしだけを呼んで赤児の葬儀に立ち会わせた、といった次第を。……<sup>30)</sup>

衝撃的な森の中での一夜のあと、ブラウンの若旦那は午前様よろしく、セイレム村に帰ってくる。朝の散歩をしている老牧師から、通りすがりに祝福の言葉をかけられると、まるで呪咀の言葉を浴びせかけられたかのように、この聖職者から身を引く。グーキン老執事が家庭礼拝で祈っている声が、開いている

窓から聞こえると、「この魔法使いめは、どんな神にむかって祈っているのだ？」と呟く。朝の牛乳を届けにきた女の子にクロイズのかみさんが教義問答を試みると、まるで悪魔の手から引き離そうとするかのように、その女の子をひたたく。会堂の角を曲がったあと、ピンクのリボンをつけたフェイスが嬉嬉として駆け寄って、キスをしようとする、「お早よう」も言わずに、やり過ぎてしまう。安息日には教会の礼拝に出席はするものの、会衆の歌う讚美歌は聞くに耐えず、罪深い歌が耳を聳せんばかりに聞こえてきて、讚美歌はかき消されてしまう。牧師先生が聖書に手を置いて、講壇から熱っぽく、キリスト教の真理を説き明かすのを聞いていると、顔が青ざめて、会堂の屋根が神の名を汚す牧師と会衆の上に、音をたてて崩れ落ちてくるのではないかと危惧し、真夜中に突然、目を覚まして、フェイスの胸から身を引くことも稀ではなく、朝や夕べの家庭礼拝で一家の者がひざまづいて祈りを捧げるときも、顔をしかめて、なにやら独り言を呟き、妻の顔をじっと見つめたあと、そっぽを向いてしまう<sup>31)</sup>。

これが、一夜のうちに変わり果てたブラウンの若旦那の姿であり、その度し難い人間不信は、要するに、人間の善意、愛情、信仰その他、あらゆる行為の背後に「偽善性」の影を感じ取ってしまうことに基因しており、ブラウンの若旦那は、いわば、このような人間不信という「死に至る病い」に冒された人間として、その病いから癒されぬまま、その長い一生を終えた、とされるのである。

この物語を語った語り手もしくはホーソーンは、もちろん、ブラウンの若旦那の人間的な若さ、または、ある種の潔癖さの落とし穴、その危険性に気付いていたに相違ないが、おそらくは善意の人であった叔父ロバート・マニングの中に「偽善性」を早くも嗅ぎ取ったホーソーンは、そのような「偽善性」を嗅ぎ取ることから生ずる人間不信が、予想される自分の将来の結婚生活を毒し、ブラウンの若旦那のような末路を辿りかねないことを恐れたのではあるまいか。

こうして我々は、「ブラウンの若旦那」をホーソーンの父方の先祖の所業に

対する心理的なこだわり、母方の先祖の醜聞および父親代わりの叔父とのアンビヴァレントな人間関係の二つの観点から論じて、結局、同じような結論に到達したことになるのであるが、その結論が、なにがしかの説得力をもつことを期待しつつ、最後に、思いもつかぬ論点からの推論を試みることにしたい。

その論点とは、これもホーソーンの母方の先祖に関することであるが、ホーソーンの母方の祖父、つまり、ホーソーンの母エリザベス・クラーク・マニング (Elizabeth Clarke Manning) (1780—1849) と叔父ロバート・マニングの父リチャード・マニング二世 (Richard Manning, Jr.) (1755—1813) は鍛冶屋を職業としており、職人であるところから「グッドマン」 (“Goodman”) という敬称をつけて呼ばれていたらしいのである<sup>32)</sup>。そこで、その祖父の仕事振りを見ながら育ち、実利的な職業に就くことを期待されたホーソーンは、鍛冶職人を、自分が憧れる芸術家ないしは作家——しばしば、腹の足しにもならないことをしている人間と見做された——の対極にある人間として考え、その結果、ホーソーンは己れの作家志望を恥じ、それだからこそ、また同時に、逆説的ながら己れの創作意欲を掻き立てられた。

ホーソーンにおける、このような対抗意識を我々は、短篇作品では、たとえば「美の芸術家」 (“The Artist of the Beautiful”) (1844) における鍛冶屋ロバート・ダンフォース (Robert Danforth) と「美の芸術家」オーウェン・ウォーランド (Owen Warland) との対立の中に、また長編小説では、たとえば『ブライズデイル・ロマンス』 (*The Blithedale Romance*) (1852) の元鍛冶屋ホリングワース (Hollingworth) と詩人で語り手のマイルズ・カヴァーデイル (Miles Coverdale) との対立の中に見ることができる。この対立関係を敷衍した形で、年上の男性が魅力的な女性をあてがって、年下の男性を誘惑し、あるいは苦しめるといような奇妙な三角関係を、短篇作品では先きに触れた「ぼくの身内、モリヌー少佐」や「ロージャー・マルヴィンの埋葬」、長編小説では『緋文字』の中に読み取り、対立する一組の男性の中にホーソーンとその叔父ロバート・マニングの姿が反映されている、としたのが、この小論の最初に紹介しておいたグロリア・C・アーリックであった。



このロバート・マニングは、最初、セイレムでブローカーの事務所を開いたが、24歳の時に、寡婦となった姉〔ホーソーンの母〕とその三人の子供たち〔6歳のエリザベス、4歳のナサニエル、生後半年のマリア・ルイーザ〕を引き取り、その後、父親が関係していた駅馬車の経営を引き継ぎ、1817年からは果樹の栽培に乗り出し、品種改良なども精力的に行なって、果樹の普及と販売を手がけ、その果樹園はアメリカ随一、梨の木だけでも一千種以上にのぼったと言われる。また、大変な勉強家でもあり、何年にもわたって園芸関係の刊行物に定期的に寄稿し、1838年には『果物の本』(*Book of Fruits*)という書物を出版している<sup>33)</sup>。

従って、ロバート・マニングは、鍛冶屋であった父親と違って、職人であったわけではないが、その父親が「グッドマン」という敬称をつけて呼ばれていたとすれば、その二代目として「マニングの若旦那」(Young Goodman Manning)と呼ばれてよいことになる。このマニングの若旦那は、ホーソーンにとっては、父親代わりをつとめてくれた「恩人」であったが、その長い独身時代を通じて、少年ホーソーンに同性愛的な誘いをもって迫る脅威を与え続けた「偽善者」であった。このような「偽善者」が妻を娶ったとき、その結婚生活はどのようなものとなることが予想されるだろうか。ロバート・マニングは1824年になってエリザベス・ドッジ・バーナム (Elizabeth Dodge Burnham) という女性と結婚するが、ホーソーンは、この叔父夫婦の結婚生活が寒々としたものとなり、人間不信のうちに叔父がその一生を終える。という妄想を、ひそかに「ブラウンの若旦那」の物語に仮託して、復讐を図ったのかも知れないのである。このような推論の当否はともかく、父親代わりの叔父が1842年に死亡したとき、ホーソーンは、理由にもならない理由を挙げて、叔父の葬儀には出席しなかった<sup>34)</sup>。

1) Cf. Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (1979) p. 341. なお、以下の記述は同書に負うところが多い。

2) この短篇集のタイトルは、古くはホメーロスの『オデュッセイア』に見える句

- “It is tedious to tell again *tales* already plainly told” [Homer, *The Odyssey* XII, 452] [イタリックスは筆者]、または、シェイクスピアの『ジョン王』に見える句 “Life is as tedious as a twice-told tale, vexing the dull ear of a drowsy man” [Shakespeare, *King John* III, iv, 108] [イタリックスは筆者]に由来し、一義的にはホーソーンが自らの作品は「すでに語られた物語の焼き直し」、「二番煎じ」、「語り古された陳腐な物語」でしかない、と卑下して見せているように見えるが、「再話」はときに、「再解釈」を含むものであり、たとえばニュー・イングランドの歴史に素材を求めている作品においてホーソーンは、その歴史の再解釈を試みているのだ、とする、ひそかな自負を匂わせているのではあるまいか。
- 3) Cf. Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (1972) p. 73.
  - 4) Cf. James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in His Times* (1980) pp. 185—186.
  - 5) Cf. Neal Frank Doubleday, “Hawthorne's Estimate of His Early Work” [*American Literature* (Jan., 1966) pp. 403—409.]
  - 6) Cf. Gloria C. Erlich, *Family Themes and Hawthorne's Fiction: The Tenacious Web* (1984) pp. 104—145.
  - 7) Cf. George R. Stewart, *American Ways of Life* (1954) p. 190.
  - 8) Cf. Harry Levin, *The Power of Blackness* (1958) p. 54.
  - 9) Cf. Fanny N. Cherry, “The Sources of Hawthorne's ‘Young Goodman Brown’” [*American Literature* (May, 1934) pp. 342—348.]
  - 10) Cf. *Ibid.* なお、「犬の対話」は、セルバンテスの『模範小説集』(*Novelas ejemplares*) (1613) に納められている。
  - 11) Cf. Daniel G. Hoffman, *Form and Fable in American Fiction* (1961) p. 166.
  - 12) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” [Centenary Edition Vol. X p. 89.]
  - 13) 前者の立場の代表格は、Newton Arvin, *Hawthorne* (1929) であり、後者の立場の代表格は、F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (1941) や、Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (1952) である。
  - 14) Cf. Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (1966) pp. 96—116.
  - 15) Cf. David Levin, “Shadows of Doubt: Specter Evidence in Hawthorne's

- “Young Goodman Brown” [*American Literature* (Nov., 1962) pp. 344—352.]
- 16) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown,” [Centenary Edition Vol. X p. 89.]
  - 17) Michael Davitt Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England* (1971) p. 76.
  - 18) 邦訳としては、たとえば以下のものを挙げることができる。

「若いグッドマン・ブラウン」(小島信夫訳)〔大橋健三郎編『アメリカ短篇名作集』(学生社, 1961)〕

「若いグッドマン・ブラウン」(荒正人訳)〔西川正身編『世界短篇文学全集13』(集英社, 1964)〕

「若いグッドマン・ブラウン」(荒正人訳)〔ホーソーン/マーク・トウェイン(大橋健三郎, 石川欣一訳)『七破風の屋敷』『ハックルベリー・フィンの冒険』(筑摩書房, 1966)〕

「若いグッドマン・ブラウン」(大橋健三郎訳)〔ホーソーン(大橋健三郎訳他『緋文字/美の芸術家』(集英社, 1970)〕
  - 19) Cf. Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana; or, The Ecclesiastical History of New-England* (1702) [Russell & Russell 版. (1967) Vol. 1 p. 128.]
  - 20) Cf. Thomas E. Connolly, “How Young Goodman Brown Became Old Badman Brown” [*College English* XXIV (1962)]
  - 21) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” [Centenary Edition Vol. X p. 77.]
  - 22) Cf. Vernon Loggins, *The Hawthornes: The story of seven generations of an American family* (1951) p. 34.
  - 23) Cf. Thomas F. Walsh, Jr., “The Bedeviling of Young Goodman Brown” [*Modern Language Quarterly* XIX (Dec., 1958) pp. 331—336. Reprinted in Thomas E. Connolly (ed.), *Nathaniel Hawthorne: Young Goodman Brown* (The Merrill Literary Casebook Series) (1968)]
  - 24) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” [Centenary Edition Vol. X p. 77.]
  - 25) *Idem*, “The Custom-House” [Centenary Edition Vol. I pp. 9—10.]
  - 26) *Idem*, “Young Goodman Brown” [Centenary Edition Vol. X pp. 89—90.]
  - 27) Cf. Vernon Loggins, *Op. Cit.* pp. 88—89.
  - 28) Cf. Philip Young, *Hawthorne's Secret: An Un-told Tale* (1984)
  - 29) Cf. Gloria C. Erlich, *Op. Cit.* p. 118.

- 30) Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown" [Centenary Edition Vol. X p. 87.]
- 31) *Cf. Ibid.*, pp. 88—89.
- 32) *Cf. Vernon Loggins, Op. Cit.* pp. 195—196.
- 33) *Cf. Dictionary of American Biography* Vol. VI pp. 252—253.
- 34) *Cf. Gloria C. Erlich, Op. Cit.* pp. 112—113.

(一橋大学教授)